

周恩来を喪った へ行くか??



田中前首相と握手をかわす
毛主席と故周氏（昭和47年）

出席者

伴野 朗（朝日新聞外報部）

中島嶺雄（東京外語大助教授）

松野谷夫（アジアレビュー編集長）

吉田 実（朝日新聞前北京特派員）

（出席者はアイウエオ順）

巨星墜つ！ 中国革命と共に生きた、
新中国の宰相、周恩来氏の死は内外に大
きな衝撃を与えた。中国の前途は一体ど
うなるのか。

（文中敬称略）

松野 周恩来亡きあとの中国が
どうなるかということですが、周

恩来は党の副主席としてナンバー
2の地位にあった。それから國務
院総理ですね、この穴を埋めなけ
ればいかんわけです。

手続きの問題からいうと、党の

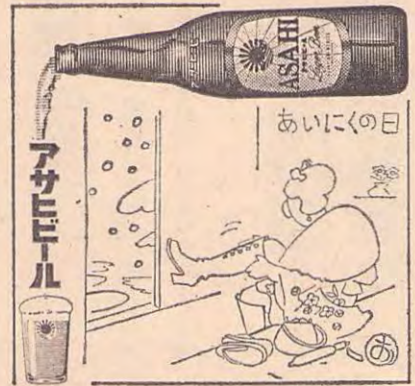
ほうは第十期三中全会を開いて正
式に決めなければいかんだろう
し、國務院総理のほうは人民代表
大会の第四期第二次会議を開いて
決めなければならない。

一般には、鄧小平第一副首相が
首相に昇格して、彼を中心にして
張春橋、王洪文らの集団指導的な
体制でいくのではないかというこ

ともいわれますが。

吉田 毛沢東、周恩来のあと、
中国の党、政、軍を握りながら行
動ができ、調整していける立場に
一番近い人はやっぱり鄧小平だ
という感じは非常にありますね。
ただ、それを張春橋、李先念とい
った人たちが中心になって補佐を
して、実際の中国を運営してい
くんじゃないかという感触です。

松野 いま、外国から指導者が
来たときに一番よく合うのは鄧小
平で、経済外交的な面を担当して
いるのが李先念で、農業関係は華
国鋒と陳永貴、という分担が大體
できているようですね。それに紀
登奎。しかし鄧小平が周恩来の後
継者になった場合には、かなり違
ってくる面があると思うが。



中島 いろんな面でかなりの連

徹底分析座談会

盤石の柱石、 中国はどこ



氏 来 恩 周 故

が出てくると思うんですが、中国の当面の政治を考える場合に、もう一つ重大な節目が間もなく迫っているわけですね。毛主席がいづつ天寿をまっとうするかということとを、今回の事態によつてますます中国のリーダー、民衆のすべてが考えていると思う。そういう状況の中では、迫り来る状況を想定して、歴史的な移行期を何とかが乗り切ろうという一種の凝集力が働いているのではないかと。

批判的孔運動から「大躍進」批判、教育革命論争を見ても、中にいくつかの政治潮流がありながら、それが大きく拡大し発展することなく終息していくような気がします。やはり、いまの時代は、毛沢東以後の時代への移行期である、という認識があると思う。

そうすると、これから訪れるであろう最大の転機を見るまでは、当面大きな変化はないのではないかと。鄧小平が非常に目立たない形でジワジワと党、軍、政を握つてますし、張春橋もそれにくつつくような形で党、軍、政をみんな握つている。こういう人たちは実務的な能力を持つわけですから、事務局なり書記局を握る政治家の強さをいかに発揮して、うまく後継体制をつくつていくと思うんですけれども、私はドラスチックな転換は抑制されるんじゃないかという気がする。

文革から尾を引く 人間関係の影響は？

松野 鄧小平は文革中に劉少奇と並んで批判されましたね。鄧小

平に対する批判もかなり浸透した面があると思う。それを、毛主席の鋭断というところで一応は大衆も納得しただろうが、彼が周恩来の後継者になってくると、やはり問題はあつるんじゃないかと思う。

とくに、毛沢東主席が健康で強力な指導力を発揮しているという状態であればまた違つてくると思うが、ある意味では毛主席も指導力がかなり衰えてる面があると思うんです。そういう面から見ると、私はかなり問題があるんじゃないかと思うんですがね。

吉田 鄧小平が七三年に出てきて今日にいたるまでかなり時間の経過がある。その過程で、国家的に非常に重要なことがあつた。七四年四月の国連の資源特別総会で、鄧小平が「三つの世界論」をやつたことです。このあと、彼が帰国した時、毛沢東主席を除いて全員が出迎えに出いましたよ。ぼくはそのとき、これは外に対して言つていると同時に、内側に対して鄧小平への支持を強調しているんだなと思つた。そういう状況をいろんな場面でこしらへ上げてきたんだなという感じがする。

毛・周両首脳は後継指導体制づくりに腐心し、第十回党大会（七三年八月）で党の指導体制を、第



バリ島で歓迎を受けるありし日の周氏

四期全人代(七五年一月)で国家、政府の指導体制を一応固めたと思ふ。

この過程で特に注目されるのは、「老中青の三結合」「團結―批判、自己批判―團結」が強調されたこと。その大きな典型として、行政面で鄧小平を第一副首相、張春橋を第二副首相にすえ、軍関係の人事でも鄧を総参謀長、張を総政治部主任に任命した。だが、党主席の地位をだれが継ぐかについては、現在の党の序列からみると王洪文の昇格が考えられるが、予断を許さない状況であろう。

大きい個性がバタバタと倒れていったあとは、その路線を守りながらそれに忠実な線で行くというところで、ドラスチックな変化は当分はないんじゃないかと思う。

伴野 七三年四月に鄧小平が復

活したとき痛感したのは、副首相という元の國務院の肩書で復活したことです。これは復活幹部のなかでは例外で、鄧小平だけなんです。あとの復活幹部は「その他の主な出席者」というところは何の肩書もなく名前が出ています。これは明らかに、彼に政務を担当させるといふ周恩来並びに毛沢東の裏づけがあつての復活です。

しかし、当面の政策は変わらないうとしても、かなり過渡期的な感じがするんです。鄧小平がはたして永久安定政権かという、そうではないような気がする。

中島 確かに、いまのような立場では、鄧小平や張春橋はいままでの路線を継続して穴を埋めていくだろうけれども、同時に、鄧小平が、周恩来や毛沢東と同じであるか、ということになりますと、

やはり文化大革命のなまなましさを思い出しただけでもわかるように、個性の違いがあり、考え方の違いがあり、路線の違いがある。

ですから、毛・周が一致していまの復活幹部を出してきていると、ハーモニアスに単純に考えられない面があるんじゃないかという気がするんです。

鄧小平は、文革のときにあれば批判されたんです。いろいろな面が劉少奇や他の実権派とは違う面があつたにせよ、単に紅衛兵から批判されただけじゃなく、実際に九全大会にはあれほどのリーダーだった者の名前も外しちゃったんです。その鄧小平がああいう形で復活してくるということになれば、中国民衆の中には、それじゃ劉少奇と鄧小平の違いは何なのだろう。

という疑問が生まれるかもしれない。

鄧小平個人にとってみれば、あつたときに自分は批判された、そして周恩来が自分たちの側に立たずに毛沢東の側に立ったことに對する、鄧小平と周恩来との間の深層心理の問題だつてあつたと思う。

それから、毛沢東と鄧小平との間にはいまはたしかにうまくいっているが、深層心理においてはあれほどのことを言い合つたり言われたりしたわけだし、片や江青夫人もいるわけで、そう単純じゃない問題もある。そういう、いわば機微に觸れるような、なまなまし人間関係が、はたして今後の中国政治にどういう影響を与えていくのか、ということじゃないかと思ふ。

第二野戦軍系の登用は、両刃の剣

伴野 もう一つ問題になるのは復活幹部の基準の問題がまた明らかにされていないことです。「悪いやつだ、悪いやつだ」といわれた鄧小平が出てくる。だけれど、復活の基準は何だ、劉少奇が出てこない理由は何だ、ということになる。

この復活の基準が問題にされた

する明確な回答はまだ与えられてない。ただ「病を治して人を救う」という毛沢東の幹部激務政策という非常に抽象的なものでしか答えられていない。

ぼくらが見ている限りでは、林彪とけんかして切られた人たちは例外なく復活している。その一番いい例が羅瑞卿ですね。これは当時「四家店」といわれて、もっとも悪いやつだとされた彭真、陸定一、楊尚昆、羅瑞卿、この四人の中で羅瑞卿だけは復活している。

羅瑞卿は軍の近代化路線をめぐって林彪と衝突して切られたといふいきさつを考えれば、羅瑞卿が復活したなぞは解けると思ふんです。しかし、その他の基準がわからない。要するに、劉少奇と鄧小平の違いをもう少し明確にする必要が、いま党中央に課せられた一番の義務じゃないかと思ふんです。

中島 逆にいえば、毛沢東以後への不安がかなり残るわけでしょう。そのときにはいろんなことが起こり得るといふことを含んでいるわけですね。それまでは、複雑な人間関係もそう表面化しないでしょうが。

伴野 林彪が切られたというのは、八路軍の一五師、第四野戦軍系統の人たちが林彪の台頭と

伴野 新憲法の中で自留地を認めたい。あの憲法にしろ、金人代の政府活動報告にしろ、何か周恩来の遺言みたいな気がしてしょうがない。一つの大目標、二〇〇年代までには工業、農業、国防、科学・技術の面で世界の前列に立つという大目標を掲げたわけでしよう。それにいくには妥協的な安定団結ではなく、闘争しながらの安定団結が前進に結びつく、という道を示した。その中で

「水滸伝」批判が行われた。この「水滸伝」批判というのは投降主義批判ですよ。投降主義で思いつくのは劉少奇批判なんです。

つまり、文革の初期に劉少奇が批判された中に、一九三六年に彼は北方局書記時代に国民党に捕まった同志に、革命の犠牲を最小限にとどめるという名目で偽装転向を命ずる。これが修正主義につながる。これが修正主義につながる。これが修正主義であるということ、感本両方に激しい攻撃を受けるわけですね。

文革で出てきた新生事物がいかにあるわけです。新しい史観とか教育革命とか。それを否定する傾向と、それに対する攻撃が出てきている。周恩来は、新生事物もいけれども、やはり大目標に達するために、ある程度の妥

協は、自留地を認めるくらいは妥協は必要じゃないか、ということを書いてきたわけですね。

中島 私は、「水滸伝」批判は劉少奇だとは思わない。自留地を認めた憲法というのは周恩来の遺言だ、という意見には賛成なんです。だとすれば、もう一つ置き換えれば劉少奇の遺言でもあるわけです。つまり、空権派の経済調整政策というのは、まさにそこにあつたわけですね。

それに対する急進派からの抵抗があるわけで、それが「水滸伝」批判だったという見方もできる。現代の宋江はそれかという「水滸伝」批判は、周恩来ないしは周

松野 中国の新憲法には二つの相矛盾する考え方があって、その一つは劉少奇の考え方が入っているわけですね。しかし、それをまた批判する路線があるわけで、それが「水滸伝」批判になって出てきている。

伴野 昨年三月一日に発表された姚文元の論文は、新憲法に盛り込まれている自留地問題などはブルジョア特権で、これを認めるようなことが続けば修正主義

恩来的なものだと思う。そうすると、周恩来のこの一年間ないし二年間の活動の停滞、つまり十全大会をピークにし、去年一月の金人代を最後にして、それ以降は病気があったこともあるけれども、ある意味で周恩来の活動は制約されたんじゃないかという気がする。鄧小平なんか出てきて「周恩来氏は病気で」ということをあまりにも言いすぎたような気がするんです。

周恩来はもう政治的にアウト・オブ・デートだということを感じて、フォードやキッシンジャーとやったでしょう。ここにポイントがあるような気がする。

に臨むという批判をしているわけですね。これは読み方によつては、憲法に抵触する論文ですよ。中島 いてみれば、新しい憲法は文革派のものと脱文革派のものとの妥協ですから、文革派にとつては、妥協した部分について姚文元が論文を書いて、もういっぺん批判するということが出てくるし、片方に対してはその部分を擁護する。つまり、玉中色に認めるような部分もあって、一つ

の憲法の中に双方の意見が入っている。それが一番表れたのは、姚文元の論文と、その一カ月後に表れた張春橋の同じようなテーマをめぐる論文ですよ。

ポスト周を考えると、いわゆる文革左派の今後の動向は大事な問題だと思つて、かつて文革小組に所属した人たちが、あるいはそういう人たちが文革左派というならば、いまのリーダーの中では張春橋も、姚文元もともに文革左派だ。その庇護のもとに出てきた王洪文という新星も文革左派だ。最近、張春橋が台頭してきて、文革左派の一番重要な人物だと思われた姚文元が落ちてくるでしょう。今回の弊委員の名簿を見てもかなり落ちてますよ。

つまり、同じ文革左派の中でも実務的、あるいは妥協的な、スケールの大きい人物のほうが台頭してきたことで、ある意味では文革左派の分裂が起こっている。

姚文元論文と張春橋論文をくらべると、資金制の問題にしても自留地の問題にしても、明らかに違つてくる。姚文元は非常に原則的なことをいっているのに対し、張春橋は「まあまあ、いいじゃないか」という感じがする。その違いが今後の各派の去就を占うわけですね。姚文

元や王洪文という形のリーダーが生きのびていくには、張春橋のような形で潤滑合わせが必要にならないといけないのではないかと。松野 張春橋、王洪文というのはもう文革左派ではない、といつていいんじゃないでしょうか。むしろ実務家のほうにぐつと近づいてきていると見ていいと思う。

中島 王洪文もそう考えていいんですか。

松野 まあ、ぼくはいいと思つてますかね。

中島 王洪文はまだまだ文革派の新星で、実際の力はなくて毛沢東が健在である限りの若いプリンスではないか、という気がする。

伴野 さっき鄧小平は暫定的要素が強いといった裏づけは、張春橋の存在だと思つてます。私は周恩来の後継者という、鄧小平より張春橋に周恩来に似たイメージを見るのです。周恩来が成長したと同じような過程を経て、周恩来型の政治家に变身した。次の世代から周恩来的な人を見つければ、私は鄧小平じゃなく張春橋だと思います。ものの考え方、外交面のやり方をみると、そういう感じがしますね。強固一点張りの文革左派というイメージからは完全に变身していると思えますね。

第二の周恩来の道歩む？ 張春橋

週刊朝日

1-23

1976

150円

No2に徹した不倒翁「周恩来」処世術の秘密

????????? ポスト周 ????????????

突如のソニー首脳交代劇がねらうIBM式経営戦略



大学
高校
入試

土壇場30日間の偏差値作戦が合否のカギ

肩書を外されたサントリーの絶望度

11月特訓で売った経営学